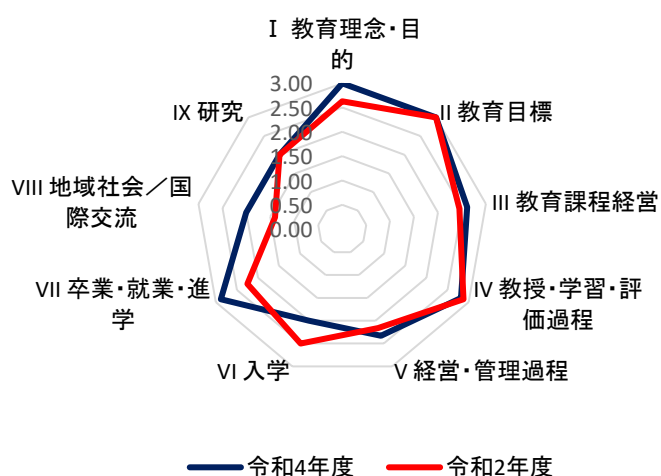


【学校評価の結果】

1. 自己点検・自己評価結果 9カテゴリー、125項目



全体的にカテゴリーVI以外の自己評価は概ね高くなった。カテゴリーVIIは、卒業生や就業先の管理者へのアンケート調査を実施し、卒業生の就業状況を分析する等を通して、課題を明らかにしてきたことが自己評価を高めた。

カテゴリーVIIIは地域での委員会に教員が参加するなど地域のニーズを踏まえた活動により評価が高まった。

2. 学生による授業評価、臨地実習評価

1) 講義について

評価項目	R4年度30科目	R3年度11科目
1. この講義に意欲的に参加した	3.8	3.7
2. 教員は、学生の興味を引き出すような工夫をしていた	3.9	3.8
3. この講義は興味・関心が深まる内容だった	3.9	3.8
4. 学習目標は達成できた	3.8	3.7

専任教員が担当する30科目の講義について授業評価を行った。4点満点中3.8と概ね評価は良かった。昨年よりも上昇しており、特に「項目4. 学習目標は達成できた」が高まったことは学生の講義の満足につながるものと考えられる。

2) 臨地実習について (2年生の領域実習すべての評価の平均点)

評価項目	R4年度
1. 課題を持ち、目標が達成できるよう努力した	3.6
2. 事前オリエンテーションの内容は、実習を円滑に行うために役立った	3.7
3. 援助について、教員から適切な助言・指導が得られた	3.7
4. 看護過程の展開について、教員から適切な助言・指導が得られた	3.7
5. 教員は学生が理解しやすい言葉や方法で指導していた	3.8
6. 教員は看護者としてモデルになっていた	3.7
7. 教員と指導者間で指導の方向性がずれないように連携がとれていた	3.6
8. 全体として充実した実習だった	3.7

教員、指導者からの指導助言について概ね評価は高かった。しかし、項目7では教員と指導者間で指導の方向性にズレを感じている学生が多く、今後、教員・指導者間での受け持ち患者の看護について意見交換・情報交換を密にしていく必要がある。

3. 卒業後の仕事への心境に関するアンケート調査の実施・結果

対 象：卒後2～4年目の当校の卒業生 34名

調査期間：令和4年7月27日～8月31日

調査方法：直接配布又は郵送にて配布・回収 回収数30 回収率88%

- 1) 仕事へのやりがい感の有無 1年目：有25 無5 現在：有26 無2 (未記入あり)
☞卒後1年目も現在も8～9割の者は仕事へのやりがい感を抱いていた。
- 2) 仕事を辞めたいと思ったことの有無：有19 無10 (無回答1)
☞6割の者は辞めたいと思ったことがあった。
- 3) 入職後、辞めたいと思った時期 (辞めたいと思ったことがある19名の回答 複数回答あり)

1か月	3か月	6か月	12か月	2年	3年	いつも不定期
2 (10.5%)	5 (26.3%)	5 (26.3%)	6 (31.6%)	2 (10.5%)	0 (0%)	4 (21.1%)

☞辞めたいと思う時期は、入職後1年間以内が圧倒的に多かった。

- 4) 辞めたいと思ったことがある人19名について、その時の相談相手 (複数回答)
同僚:10 友人:8 上司:5 先輩:4 家族:4 パートナー:3
☞相談相手として、職場関係の人が多かった。
- 5) 仕事を続けるために大切な事 (自由記載から上位3つ)
①職場内に相談相手をつくる。 ②自分の考え方や捉え方を変える。
③職場内でよい人間関係を築く。
- 6) 仕事を続けるために、在学中から大切な事 (自由記載から上位4つ)
①学習すること。 ②分からない事をそのままにしない。 ③対人関係を築く。
④自分に見合った就業先を探す。

4 看護への動機づけへの働きかけ

- 1) 1年生と教員との座談会を開催した。(7月29日開催 参加者：1年生21名 教員8名)
座談会后、看護師になりたい気持ちに大きな変化はなかったが、教員の看護実践について興味深く聞き、関心を示していた。
- 2) 卒業生と2年生との座談会を開催した。(7月27日開催 参加者：2年生22名 卒業生13名 (卒後1～4年目))
アンケートから「現場の率直な意見が聴けた。」「経験年数による気持ちの変化が聴けた。」「仕事のイメージがついた。」等、先輩との会話を通し働くイメージを作ることができた。

【学校関係者評価委員会からの意見】

令和4年度の当校の自己評価結果をもとに、学校関係者評価委員会を開催し、以下の意見を得ました。

1. 座談会や卒業生、卒業生の就業先へのアンケート等、交互に実施するなど継続していくとよい。
2. 座談会は、在校生だけでなく卒業生をフォローし、意見を聞くことで教育を充実させている。
3. 目的、目標を持ち教育していることを指導者やスタッフに伝えていくことで、受け入れ側の環境も整えていけると思われる。
4. 自己の看護観が育っていないと看護師として成長しない。基礎教育から看護観を育ててほしい。
5. 看護が活躍する場は病院以外にも広がっており学生の時から様々な現場を経験させていくとよい。

【今後の課題】

1. 講義や実習の中で学生自身の価値観や考えの表出を促し、学生の看護観を育む教育を実践する。
2. 学校教育の目的・目標を示し臨床と連携し、学生の学びが深まるよう実習環境を整えていく。
3. 卒業生との座談会やアンケートを継続し、結果を教育活動に活かしていく。
4. 主体的に考え学習するように講義方法や指導方法を工夫し実施していく。